日本語教育通信

http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/

発行・編集　国際交流基金 日本語グループ
編集協力　国際文化交流推進協会

第56号

2006年9月発行　ISSN 1343-2524

JAPANFOUNDATION

CONTENTS

■ 表紙・特集 …… 1
日本語新表現の合理性
明海大学教授　井上史雄

■ 日本語の教え方イロハ　第2回 …… 4
読解

■ 授業のヒント …… 6
やる気を引き出す授業のテクニック

■ 新聞・雑誌から見る現代日本　第24回 …… 8
親心　食の安心

■ 本ばこ（新刊教材・図書紹介） …… 11

■ 文法を楽しく!!　第6回 …… 14
「～て～」(1)

■ KC（関西国際センター）研修生のNipponリポート 第6回 …… 16
公共図書館のサービス

※本誌で、ルビが文字の下に付いているのは、紙や物差しなどでルビを隠して、漢字の読みの練習ができるようにするためです。

On the Web

以下の記事はJFのウェブサイトのみにてご覧になれます。

■ 日本語・日本語教育を研究する 第30回
日本語の終助詞について考えるために大切なこと
神戸学院大学人文学部教授　野田春美

■ 授業に役立つホームページ 第15回
練習問題を作ろう

■ 海外日本語教育レポート 第13回
オーストラリアの学校教育過程における日本語教育
NSW州教育訓練省日本語コンサルタント　サリー・シマダ

■ にほんごハローワーク 第6回
語学の上達のためには目的をもつこと
フレディ・アルミホスさん
ミヤリサン製薬株式会社（出身：エクアドル共和国）

海外の読者の皆さまへ

54、55号に同封した**継続送付に関するアンケート**は12月31日で締切ります。ご回答がない場合は、**送付を停止**します。アンケートはウェブサイトからも入手できます。

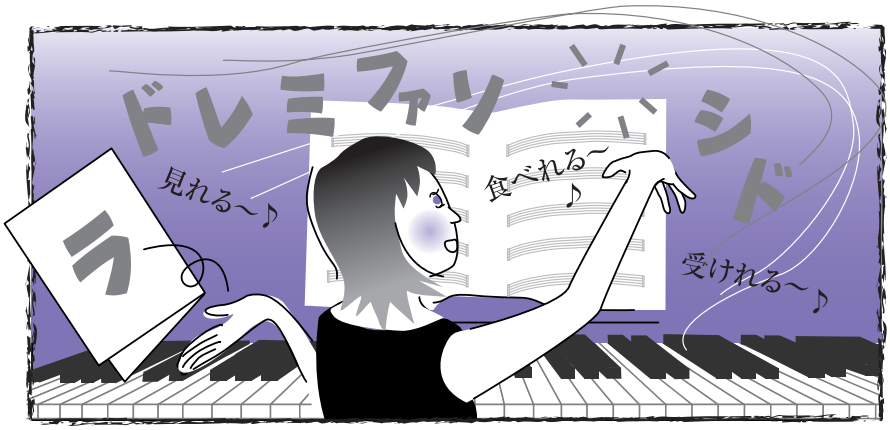
Caution

http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/publish/tsushin/index.html

『日本語教育通信』　第56号

2006年9月発行

編集・発行　国際交流基金
日本語事業部企画調整課
〒107-6021　東京都港区赤坂1－12－32
アーク森ビル21F
TEL. 81-3-5562-3525　FAX. 81-3-5562-3498
E－Mail jfnckt @ jpf.go.jp
編集協力
財団法人 国際文化交流推進協会



日本語教育通信には、海外で日本語教育に携わる皆さんから「最近の日本語について知りたい」という声が多く寄せられています。そこで、今号の表紙特集では日本語の変化や最近の表現が広がる理由や、それらをどう捉えることができるか、明海大学の井上史雄先生に書いていただきました。

日本語新表現の合理性

明海大学教授　井上史雄

言語教育と言語変化

ことばを学ぶ立場からいうと、二つ以上の言い方があるのは、むだに思える。どちらか一方に定まれば、覚えるほうも(教えるほうも)楽だ。たとえば日本語教育で、初歩の1000語を覚えるときに、「あす」と「あした」のような同じ意味の二つの言い方があると、1語増えるのと同じことになる。だから教師から、一つの標準を決めてほしいという声が上がることがある。

ところが、二つ以上あるときに、よく調べてみると、一方が古くから使われていて、もう一方が新しく出た言い方であることが多い。これは日本語が変化する途中の段階だ。そして新しいほうの言い方には、広がるだけの合理的理由がみつかる。けれども合理的だからといってすぐに使っていいわけではない。現在どちらが多く使われているかを確かめる必要がある。いくつかの現象については、文化庁で国民の使用状況を調査しているし(注1)、インターネットの検索ソフトGoogleなどで実際の使い方が分かる。この方法なら海外に住んでいても国内と同じように確かめられる。

以上は、ことばの「ゆれ」といわれる現象が実はことばの変化の一部であることを示している。その目で見ると、最近の若い人の日本語には、「ゆ

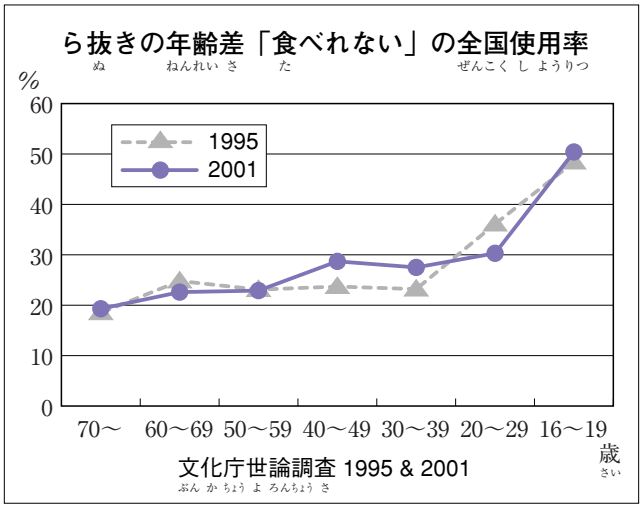
れ」がもっとたくさん見られる。その多くは、日本語の単純化と結びつくから、外国人の日本語学習者にとって、覚えやすくなるともいえる。いくつかの例をあげよう。

日本語単純化の動き

20世紀後半までは、ガ行の発音を単語の中では鼻にかけて「**ガ行鼻濁音**」で発音するのが標準的とされた。「午後」というときの二つのゴの発音は違っていた。数百年前に日本語で発音の変化があったためにこの「ガ行鼻濁音」ができたが、この発音のおかげで複雑さは増したものの、コミュニケーションが効率的になったとは言えない。アナウンサーになるためには、この発音の訓練が必要だった。日本語教育でも、鼻をつまんだりして、苦労して教えた。しかし今の若い人はこの鼻濁音を持たない。日本語教育でもうるさく言わなくなったので、初歩の授業が少し楽になったわけだ。

文法については、色々な現象で単純化がみられるが、代表的なものをあげよう。

まず最近は「**ら抜きことば**」の進出が目立つ。「見れる」「食べれる」「受けれる」などで、若い人の間ではよく使われる。本来は「見られる」「食べられる」「受けられる」である。実は現代日本語では、可能を示すのに「走れる」「行ける」と言っているが、江戸時代、明治時代ころまでは「走られる」「行かれる」と言っていた。つまり受身も可能も尊敬も、形の上で区別がつかなかったのだ。ここ数百年かけて可能の言い方を受身や尊敬と区別する変化が進んでいる。「ら抜きことば」はその変化がちょうど半分ほどにさしかかっている段階だ。もう何百年か経つと、この変化が行き着いて、日本語の動詞の可能の言い方がすべて例外なく「ら抜き」になって、使いやすくなるはずである（注2）。外国人の日本語学習は、楽になる。しかし日本語教科書で「ら抜きことば」を教えるにはまだ早い。



逆に長くなる言い方もある。「**さ入れことば**」と言われるもので、「歌わ**さ**せていただきます」などの言い方だ。正しくは「歌わせていただきます」というべきだ。しかし「司会をつとめさせていただきます」のように「させていただく」という言い方が最近広がったために、色々な動詞に「させていただく」を付ける傾向が目立つ。今はインターネットで国会の会議録も見られるので、検索してみると、議員の発言では戦後まもなくからの用例がある。長いあいだかけて、少しずつ広がったわけだ。これも将来広がれば、すべての動詞に「させていただく」を付ければいいことになるので、単純になり、覚えるのが楽になる。もっとも「話す」のように「す」で終わる動詞だと、「話ささせていただきます」になって、さ行の発音が続きすぎる。何百年後かの変化の最後になるだろう。この「さ入れことば」も日本語教科書では教えない。

「違っていた」を「**ちがかった**」というのは、若者の間に広がっている。さらに「ちがくない」「ちがくなった」「ちがくて」も出た。インターネットで探ると「違いぜ」「違いぞ」などの言い方も出てくる。「違うぜ」「違うぞ」にあたる言い回しだ。英語のdifferentという形容詞にあたることばを、日本語では「違う」という動詞で表していたが、今の若い人は「ちがい」「ちがかった」「ちがくない」という形容詞にしたわけだ。欧米人にとっては使いやすくなるわけだ。これは文章ではほとんど見ないので、日本語教科書に出ないのは当然だ。

そういえば「**全然**」の使い方も単純になった。少し前までは否定の「ない」と結びついて使われた。「全然よく**ない**よ」のように。しかし似た意味の「全然だめだよ」を、文法的に「ない」と結びつかないのに、許した。次の世代は「ない」との結びつきが必要だとは考えずに、「全然いいよ」も使うようになった。単

なる強めの言い方になり、使用制限がなくなったわけだから、幼い人にも、外国人にも使いやすい。しかしこの使い方も、ふつうは日本語教科書に出ない。

単純化＋明晰化＝合理化

言語変化は、以上のように単純化に向かうだけではない。明晰化に向かう流れもある。二つ以上の言い方の違いがはっきりするような変化だ。「ら抜きことば」でいうと、可能の言い方を受身や尊敬と区別する変化と見れば、明晰化の典型といえる。「鳥たち」「花たち」のように、人間以外にも「**たち**」を付けて複数を示す動きも、明晰化だ。単純化と明晰化の両方をまとめて「合理化」といえる。日本人にも、日本語学習者にも、ことばが、使いやすくなり、覚えやすくなるわけだ。

日本語の難易度低下

ほかにも現代日本語では様々な点で変化が進んでおり、その大部分は合理化で説明できる。別の言い方を使うと「難易度が低くなった」と言える。日本の高校や大学では、試験の成績で入りやすさが違うので、「難易度」と呼んで、数字で示すこともある。言語についてもこの考えは適用できる。複雑で覚えることが多い言語は難易度が高い、少なければ難易度は低い。世界の諸言語とくらべると日本語は、発音は難易度が低く、文法は中くらいと見られるが、文字がやっかいだし、敬語もむずかしい。このおかげで難易度が高くなる。その日本語が、今単純化によって、あちこちで難易度を下げて、ほんの少し学びやすくなった。

誤用拡大の法則

多くの言語変化は、ここ数十年、数百年続いてきたもので、変わる合理的理由がちゃんとある。だから今後も広がり続けるだろう。世の中で誤用と騒がれる現象は、どうせ広がる。はじめは使用者が少なく、「言いまちがい」と軽視される。使用者が25%くらいに増えると、「誤用」として騒がれる。50%前後になると「ゆれ」と扱われる。75%ほどに増えると「慣用」として認められ、100%近くになればりっぱな「正用」である。

使用率が増えるにつれて、使われる場面も広がる。若い人が仲間内の話しことばで使うだけだったことばが、成人にも使われるようになり、テレビなどの公の場面にも登場し、広告の文章や、書きことばにもあらわれるようになる。つまり俗語から普通の単語へと、文体も上昇するわけだ。

この動きは「**誤用拡大の法則**」といってよい。この反対が「**流行語衰退の法則**」である。「今流行っている」という意識を伴って広がることばは、まもなく使われなくなる。

教科書と言語変化

外国人向けの教科書は、どの言語でも常に古風である。「ゆれ」の段階の新しい言い方を、初歩の教科書で教えるのは早すぎる。学習者は、その国に行けば、またテレビなどを通じて、ほうっておいても若者の言い方を身につける。合理的だから、採用しやすいのだ。

必要なのは、新しい言い方に接したときに意味が理解できることである。使いかたの練習は必要ないが、指摘だけはあるほうが親切だ。教科書で出てきた言い方との違いに気づかせること、そして改まった場面では、本来の言い方を使えるようにすることが、重要だ。

というわけで、初歩の教科書では、実際には単純化してたった一つの言い方を教えることが多い。しかし現実のことばはいつも変化している。多くは何百年にわたる変化で、しかも合理的な理由がある。二つ以上の言い方があるときに、違いや理由まで覚えるとさらに記憶の負担が増えるから、初歩の学習者には無理だ。しかし、教える側は、勉強して背景を知っておく必要がある。つらいが、人生そのものが勉強の連続なのだから、しかたがない。

井上 史雄

明海大学外国語学部（日本語学科）教授。NHK放送用語委員。東京大学文学部助手、北海道大学文学部助教授、東京外国語大学助教授・教授を経て現職。専門は社会言語学・方言学。研究テーマとしては、現代の「新方言」、方言イメージ、言語の市場価値などがある。著書多数。

[注 1]
http://www.bunka.go.jp/1kokugo/frame.asp{0fl=list&id=1000001687&clc=1000000073{9.html

[注 2]
井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』岩波新書